

「フィリピン派遣参加報告書」

京都大学文学部3年 金城琴音

私は今回のフィリピン研修に参加して、今まで自分が持っていた価値観や視野が非常に狭かったということに気がついた。「日本はとても恵まれている国だよ」とかつて日本でエンターテイナーとして働いていたフィリピン女性に言われた言葉を、私は今回の研修に参加するまで本当の意味では理解していなかったように思う。あまりにも低い給料や日本人男性と偽装結婚するフィリピン女性たち、学校に通わない子供たち、街を歩いていればたくさん出会う物乞いの人たちなど、日本では見ない光景や環境が、フィリピンでは当たり前のように存在していた。もしも私が旅行でフィリピンに来ていたとしたら、これらの現状を知っても「可哀想」と思うだけで終わりだったかもしれない。しかし今回の研修では、CFO や POEA、Batis など、今の状況をなんとか良くしようと取り組んでいる機関を訪れることができた。さらに日本大使館や OFW で働く方など、日本人としてフィリピンを支える人たちにもたくさんのお話を伺うことができた。私はこれまでフィリピンをどこか日本とは全く違う発展途上国のように思っていたが、貧富の差、教育の機会の差など、フィリピンと日本が同じような問題を抱えていたり、フィリピンと日本の間の関係にも問題があったりすることに気がつき、フィリピンで起こっている問題は全く自分にとって他人事ではないと感じた。さらに、フィリピン研修を通して今まで当たり前、常識だと思っていたことや、考えたこともなかったようなことに対して疑問を持つようになった。例えば「人はなぜ結婚するのだろうか」「愛とは何だろうか」「どうして私たちは当たり前のように学校に行くんだろう」「貧困がなくなるのは何故だろうか」などの問いに対して、本当に幅広く深く、自分の中で考えるようになった。これは、今回研修に参加して自分が最も変化した部分ではないかと考えている。この思考を通して、冒頭で述べたように、自分が持っていた価値観・視野の狭さを実感し、もっと色々な社会について勉強しようと思えたことは、自分の大きな成長になった。

今回の研修で最も印象に残ったのは、日本で働くフィリピン人女性や JFC の支援を行う Batis という NGO での話である。フィリピン人の母と日本人の父を持つ、日本でホワイトカラーの職に勤める女性が日本で働くことに伴う困難さについて語ってくれた。その話の中には日本の文化になかなか適応できない辛さ、言語の壁、「外国人」で「女性」であることから受ける差別など、聞いていて胸が痛むようなものも多かった。もちろん働いている場所は日本であり、日本企業側が全てを彼女たちに合わせるということは不可能に近いかもしれないが、制度改革や私たちの意識変革によってかなり改善できるだろうという部分も多く感じた。さらに、「フィリピンから日本に渡ってきて、日本の空港に降りたとき、（父親が日本人であることから）ここは私の国でもあるんだと思ってとても感動した」と涙を流して語った彼女の気持ちを踏みにじるのはとても悲しいことであると感じた。グローバル化や外国人労働者の増加が進んでいくこれからの日本で、違う国籍の人たちと働くということがどういことなのかを、私も含め日本全体で考えていく必要があるのではないかと感じた。

また、今回の研修で、自分の英語力不足によりうまく現地の人とコミュニケーションを取れないということが何度もあり、非常に悔しい思いをした。しかしそれと同時に、うまくコミュニケーションが取れなくても、積極的に話しかけ、対話しようとする姿勢が大事であることにも気がついた。これはどこの国を訪れても同じことであるが、ずっと日本で、日本人としか会話をしてこなかった自分にとっては非常に難しいことでもあった。しかし、現地の人と直接対話をするには、その国の文化や人々に直に触れられる貴重な経験であることを研修を通して実感したため、これから海外を訪れる際には特に意識したいと思った。

今回の研修は、間違いなく自分のこれからの進路にも影響を与えたと感じる。今までは特にやりたい仕事や就きたい職業がなかったが、国籍も価値観も違う人たちとコミュニケーションを取ることに伴う気づきや学びの多さからグローバルな企業に魅力を感じるようになったし、社会の大きな問題を解決することに関わる仕事をしたいとも思うようになった。それに向けての勉強も、今すでに始めている段階である。この経験を「良い経験」として終わらせるのではなく、私の人生の大切な出来事として刻み、これからの生活に活かしていけるよう精一杯努めたい。

最後に、安里准教授やフィリピン政府の職員の方々、推進室の方々、一緒に研修に参加した先輩方、この研修に関わってくださった全ての方々に、心より感謝申し上げます。